改正月令博物筌 四月部 一

詩歌連狂

季寄註解

改正月令博物筌

夏之部

四月部目録

△印は俳諧の季とおもふべし

○養生の法の風雨のかんぐ。米の豊凶。妙菜其外人家重法のこゝろ。ある人目録にハしるさず

四月

卦 月支 調子 四ノ一丁
陰陽生 異名

△立夏節 四ノ二丁
△小満中 四ノ二丁

日令

此部ハ四月日の定りこゝろ如し故の定りこゝろを記す

△更衣 △袷 △夏衣 △卯花衣 四ノ三丁 △なつまな衣 △白重
△青簾 四ノ四丁
△女房服 四ノ四丁
△主水司始供氷 四ノ五丁
△孟夏旬 △扇祭 四ノ五丁
△瓦炉の茶 四ノ五丁
△貴船神事 四ノ五丁
△筑摩祭 四ノ五丁
△山崎日使 四ノ五丁
△稲荷祭 四ノ五丁
△大神祭 四ノ六丁
△久世祭 △山科祭 四ノ六丁
△八瀬祭 四ノ六丁
△多賀祭 △竪田祭 四ノ六丁
△平野祭 四ノ六丁

日	月	日	干	支
朔日	上	卯	甲	辰
三	上	卯	乙	巳
三	上	卯	丙	午
三	上	卯	丁	未
三	上	卯	戊	申

上申
△當麻祭 四 六丁
△松尾祭 四 六丁
△當宗祭 四 六丁

上亥
△大津祭 四 六丁

七月
△擬階奏 四 七丁
△灌佛 四 七丁

八日
△山崎天王祭 四 七丁
△戒壇堂同帳 四 七丁

九日
△地主祭 四 八丁
△行ひ供養 四 八丁
△土塔会 四 八丁

中子
△吉田祭 四 九丁

中午
△近江八幡祭 四 九丁
△苔宮祭 四 九丁

△麦本祭 四 六丁
△梅宮祭 四 六丁

四日
△水屋能 四 六丁
△竜田祭 四 七丁
△廣瀬祭 四 七丁
△傳法會 △法華會 △佛の灌湯 △竜花會 △花御堂 △五香水
△敷り花猫 四 七丁
大峯上山 四 七丁
△神衣祭 四 八丁
△夏入 四 八丁
△千團の祭 四 八丁
△向日明神祭 四 九丁
△御蔭祭 四 九丁
△関白賀茂詣 四 九丁

中申
△賀茂祭 四 九丁
△葵祭 四 九丁
△葵桂 四 九丁
△さが祭 四 十丁
△中山祭 四 十丁
△管笠懸 四 九丁
△御形日 四 九丁
△坂本山王祭 四 九丁
△賀茂の臨祭 四 九丁

中酉
△岩神祭 四 九丁

九日
△高野花供 四 十丁

飛日
△夏駒牽 四 十丁

東照宮御祭 △和哥祭 四 十丁

十七日
△茶誥 四 十一丁
△煮酒 四 十一丁
△三枝祭 四 十一丁
△榊取 四 十一丁
△神祭 四 十一丁
△斎刺 四 十一丁
△矢数 四 十一丁
△大矢数 四 十一丁
△松前渡 四 十一丁

月令
此部ハ四月一ヶ月日の定らさるもの

時令
此部ハ四月の時候よかくのごとしるす

△首夏 三丁
△清和天 梅天 三丁
△卯花朽 四丁
△新暖 四丁
△短夜 四丁
○長日 四丁
○時衣 四丁
△卯の花衣 四丁

草木 此部ハ四月一ケ月の人さ木のくさいとあろゑ〳〵しく

△餘花 四丁
△桐の花 四丁
△檀の花 四丁
△枳花 四丁
△栟子花 四丁
△実栟花 四丁
△橙花 四丁
△乳栟花 四丁
△金栟花 四丁
△抽花 四丁
△佛手栟花 四丁
△雲州橘花 四丁
△厚朴花 四丁
△楯 △盧橘 花 四丁
△桜桐花 四丁
△秦椒花 四丁
△榎花 四丁
△柳花 四丁
○槐花 四丁
△卯花 △老木卯木 △とと久木 四丁
△藪椿 四丁
△牡丹 △牡月州 △塗人州 四丁
△名取中 △富貴中 △ゆるい中 △花王
△白牡丹ゑい 四丁
△紅牡丹ゑい 四丁
△芍薬 △ゑんとせん 四丁
△杜若 △ふかのぜつく △とよあや 四丁
○知母花 四丁
△一八花 四丁
△王孫花 四丁
△覆盆子 △州いちご △蛇いちご △つゝいちご △木いちご △ゑんいちご 四丁
△芥子花 四丁
○阿片 四丁
△躍草 四丁
△白丁花 四丁
○風露州 四丁
△梅蕙州 四丁
○王不留行 四丁
△羊蹄花 四丁
○車前花 四丁
△文字ゑり州 四丁
△昊光中花 四丁
△山苣花 四丁
△風車花 四丁
△繡毬花 四丁

△岩梨　四ノ廿ノ
△石藤　四ノ廿ノ
△宝鐸花　四ノ廿ノ
△鴨足草花　四ノ廿ノ
△夏枯艸　四ノ廿ノ
△茨花　四ノ廿ノ
△千日紅　四ノ廿ノ
△青木花　四ノ廿ノ
△要花　四ノ廿ノ
△盧陀草　四ノ廿ノ
△新樹　四ノ廿ノ
△若葉　四ノ廿ノ
△木草茂　四ノ廿ノ
△木下闇　四ノ廿ノ
△葉桜　四ノ廿ノ
△若楓　四ノ廿ノ
△桐若葉　四ノ廿ノ
△常盤木落葉　四ノ廿ノ
△新茶　四ノ廿ノ
△刀豆花　四ノ廿ノ
△葵巾　四ノ廿ノ
△紫蘭花　四ノ廿ノ
△茶挽巾　四ノ廿ノ
△玉巻葛　四ノ廿ノ
△玉巻芭蕉　四ノ廿ノ
△蓮浮葉　四ノ廿ノ
○根都古巾　四ノ廿ノ
△猪突々　蓮の花　四ノ廿ノ

△梅葉　四ノ廿ノ
△麥秋　四ノ廿ノ
△麥秋風　四ノ廿ノ
△青麥　四ノ廿ノ
△麥刈　四ノ廿ノ
△麦藁笛　四ノ廿ノ
△蓮のさゝ　四ノ廿ノ
△竹の子　四ノ廿ノ
△篠筍　四ノ廿ノ
△桜実　四ノ廿ノ
△綿蒔　四ノ廿ノ
△美人艸　四ノ廿ノ

生類

此部さい四月一ヶ月のいきものとの門むき

△郭公　△子規　△不如帰　△ほとゝぎす　△時鳥　四ノ廿ノ
△勧農鳥　△ふるとり
△待郭公　四ノ廿ノ
△初聞郭公　四ノ廿ノ
△郭公一声　四ノ廿ノ
△夜郭公　四ノ廿ノ
△雨中郭公　四ノ廿ノ
△名所郭公　四ノ廿ノ
△諫鼓鳥　△布穀　△鳩鳩
△葭原雀　四ノ廿ノ
△老鶯　△乱鶯　四ノ廿ノ
△鶯付子　四ノ廿ノ
△鷹鳥塒入　四ノ廿ノ
△飛蛾　四ノ廿ノ

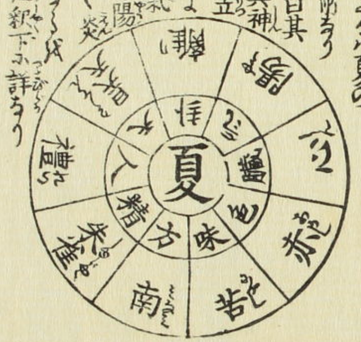
△蝙蝠 四 卅五丁
△蜘の子 四 卅六丁
△枝蛙 四 卅七丁
△蟄の子 四 卅七丁
△生節 四 卅七丁
△蚯蚓出 四 卅六丁
△蚕眉 四 卅六丁
△鹿袋角 四 卅七丁
△初鰹 四 卅七丁
△鰹 四 卅七丁

必用

此部よい○雨風の吉い破軍の向方○日ごとれうり○他行の心得○作事の吉凶○料理献立食物のよし悪等其外あるくあつい日の定まりくるる事ハ口の日令の部よりこの部よい日のごとまるゞる四月一ケ月の事とあつ山

月令博物筌 夏之部 発端

丸き肉ハ書くるハ夏の気の旺とする所なり
礼記月令ニ曰其帝炎帝共神ハ祝融其日丙丁
夏盛徳火ニ
在とい陰氣
ゆくろへ極りて陽
気さかんなる
熱の時節なり
くりうと注釈下ハ詳なり



夏申來

漢書律歴志ニ曰夏ハ則火工ゞと其精天ニ在温暖乃気百木を養ひ生ゞとらつて又昌ハ假なり物假くゝ大ハして宜平とらゝ

○和語ニよる訓ゞとろハあつきとゝ轉音の下略なりなとあと音通ゞるゆく

○方ハ南とらハ後漢書天文志ニ曰日南陸を行ゞ夏ゝとらふと見えるり

○夏ハ日月東南の赤道を行くを南陸とい人易統通図ニ出るり

○精を朱雀といひ南方火を主とし
よりて其禽を朱雀といふ
○人は禮といひ周礼の注疏に曰踐て身を
行ふを履といふ履は礼なり人の事体
を得るなり礼法身に備て見事なり
てあやまらといふ○天を昊天といひ爾雅
に曰夏を昊天といふ孔安國の云元
気廣大なるといふ陽気さうんな
して草木生ずるの体なり○卦は
離といひ人に取て和順なるよう
離を附と訓ぜ別まくてうく卦
より又はく心を生ず親に寄る忠
ようと○気は陽といひ管子に曰其時
を夏と云其気を陽といふ図の上
に詳なり○臓は心といひ人身の心乃
臓も陽を主として火に属し
夏に配當る故に火蔵といひ○色
は赤といひ説文に曰南方の色なり易
號に大赤は其盛なるといふ陽乃
色なりといふ○味は苦といひ書洪

範に炎上苦を作といふり苦味
火に属るを色ふいふ

夏異名

○朱明　○朱夏　○炎夏
○炎節　○光明　○長嬴
○昊天　○南陸　○炎帝
○仲呂　○丙丁　○執衡　○南訛
○暑節　○正陽　○假宣　○長養
○氣陽　○炎靄　○奇峯　○南爲

和名

○けらふ（雲御抄）かえそひく同上
○去やじ（袖中抄さしもぐさの註に夏の一名なりといふ）

夏異名註

○朱明といふ陽色なりいふ
くてり明らかなるといふ
○朱夏○炎夏○炎節○光明い
づれも朱明といふに同じ○長嬴
といふ物をやしなひ長ずるなり○
仲呂といふ陽散して刈ふ陰
實しく中ふあり旅陽功をなすと
ゆふ仲呂といふ○丙丁といふは禮記に
其日は丙丁丙は炳なり萬物皆炳
然として著見なり強大なり○執

鶉と云南方の神炎帝離火乘り
鶉を執て夏と司るなり○南
訛云訛八北方玄武
むうひ〳〵方物生〳〵そだらく
○正陽云陽気たくしさ時節と
いふ事なり○假宣云假大と云
いおさゝ物長大ふのびさく〳〵○長
養云云万物生長とる月なると云
○気陽云陽気此月は充満とる
なり○炎霸云陽気なりなく
うすめるなり○奇峯云夏の山
に雲の出るてんなり又夏の雲のけ
しき山の形に似るゆへ○南為
云南方の陽気といく物のなると
いふ事○炎帝○祝融○昊天い
ずれも註に夏の由来の所ふべし

法やなつ

夏の朝〳〵 秘蔵抄ニ
ひらけてあての四おさの初なれるなり
○右の外三夏ふわるる物に別ふ部有

四月之部

△此印あるい能
偕の季と称りの之

此月純陽の月
ゆえに精氣を
保養して
發泄なべ

卦の乾為天
といふ乾陽
のつよき卦之故
天ふ位をとる之はしまの卦之

四月
生六陽
乾為天

異名

△首夏△孟夏△初夏○新夏
△早夏△立夏○乏月△余月
△変秋○六陽
○槐夏○清和
○純陽○正陽之月△仲呂月△卯月
△得鳥羽の月△花殘月△夏初月
○こけて○う月△うのさる月

異名註

△首夏△孟夏△初夏○い
ずれもはじの夏と云夏之
○新夏いのこしき夏と云と○早
夏いふ之夏といふ○立夏い四月の

節の名とゝう。之月い月ふ之ーき
こゝ〻意え。余月い陽あるる月と
いゝえ。槐夏いゑんじゅ花さく故よ
ゑづく。清和い陽ふ之やわらぐえ
〻麥秋いむぎ刈月ゆく。六陽い之至
と陽ふして四月と六陽とする之。純
陽い純い專え陽さかんゑると云。正
陽之月い正ゝ陽の至極ゑる月と
いゝ意え。仲呂仲ハ中え呂い助ゝえ
陽散して外ふあり陰中ふ在て成陽の
功と助ゝえ。卯月卯の花月と畧う
○藏玉　名とういの月
花の花ゑよかまろれくゝふの
下ゝやまゝうんゑゝういの月
異傳　うれえ月
ゑ屋のかゝるとぢられゝまみゝ
うの花月と名のといえゝ
仝　ゑつ　卯月
時ゑ考い之ゝ之ゝて之月
ゑ月のゝふれかゝさのいゝふ

節　○七十二候。卯木七十二候の月出入。昼夜長短委〻左ふ考す

夏の節の日

立夏三候

蚯蚓出　蚯蚓ハ蚯ゝ此月地ゑ六陽生〻て陽氣上ゑ升て陰氣下ゑ
さぞ子蛙い陰虫ゑれば鳴ゝ○蚯
蚓い秋ゑゑれば夜ゑゑく陰虫ゑ
陽を迎へて地上ゑ出る熱乃
来るゑゝ。○王瓜いきゝうえ
○牡丹○芍藥○嬰粟○此分ゑる
花さく頃ゑれい此月の候ゝす

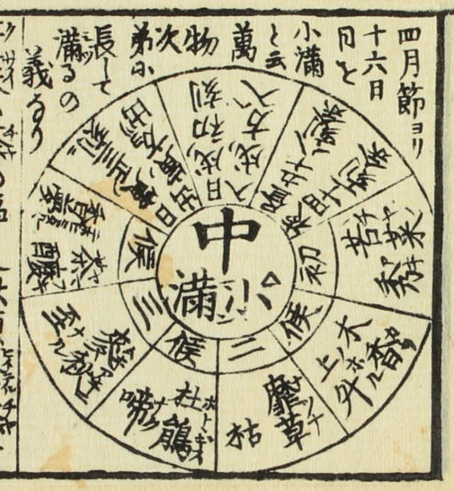
節の日　天氣占候　今日日輪ふ

暈あるべし洪水あり晴るべし旱り
○雨降るべし五穀ふとる○今夜
月えん參星東ひがしに山田半
収南ふかるべし旱り北ふかれば大風
人病む○雲の大さ車或ひは笠
むらくに見ゆるものあるの時は土星
陽水の氣なり暑ふ至て水ふ渇
とべし○東風あれば疫病の難を

節朝
雲の
行方
角
を以
年中
の風
雨豊
凶を
しるべし
○風の定まらざるはいたづらとせず
定りて一方ふく風をとるべし

中 ○七十二候○艸木七十二候○昼夜
長短○日出入等左に記す

四月節より十六日目を小満と云
萬物次第に長して満るの義なり



苦菜は茶の事なり秀穂茶とつみ取る○靡草は夏の物名なり夏の
水より生ず草の物名なり夏の物名なり○秋は稲
火氣なるあるべし○秋は稲
豆その外物の收る時なれば麥の
此月より納るを秋といふぞ
○木香上外○杜鵑啼○茶醾
香夢此皆小満の頃さかり或は啼く

天氣 小満の日と麥生日とは晴
天なるべし麥大いに熟す

日令 四月日の定りなる事支
の定りなる事をとるす

湖日

天氣

今日朝日の出る所東に雲多く西晴たるハ月中天氣ハ日ハ暈あきバ今月中雨多ー○大風吹けバ米價貴ー○西北の風吹バ飢饉とる〻〻○凡大風雨すきバ秋大水あり小雨風すきバ秋の水とくるしー晴きハ旱りと○今日雨〻きバ豊年二日ハ雨ふきバ水多ー三日の雨ハ旱り

更衣

△稔△綿抜△卯の花衣△あつ衣△橘衣△白襲又白重△浴衣○更衣の時の服襲裏表共ハ白し綾或ハ平絹白こあきと禁中の御裝束今日より改る○御帳のかたびらとゝ〻ふ〻り胡粉ぬて繪とかきそうふ〻り○着服をかゆる故更衣と〻ふ今日より綿入とかへてあわせなるべー

女衣服

衣裳の色ハ定り〻〻ふより八月中頃迄下帶こいゆ〻ハ前りそむとびさげたるはこ○昔ハ民家にて今日より足袋をとるざりしとゝ〻り禁中院方の女房ハ四季とりかゆ〻

(哥) 新古今　前大僧正慈圓

ちりそてく花の袂ハ春ふかみ
うつるこゝろ〻ハ秋の夫木

俊成

夏ハれを衣ハ〻ーてふりのり
うつるきかさ〻ひもも〻かさよ

同　田舍更衣　仲正

あれでもあづのあさぎぬ〻ぬくる
めくさぬるゝこそんやとをけき

(詞) 夏衣。花染。えうる袖がうり。ハ〻ハ形。春のかゝ。蝶の羽ころも。ぬきうゝる。卯の花。ゆの花。ゆ。夏の衣。ゆ。ゆ。ゆ

連 山ひめのそむるころの衣 宗祇
俳 いてゝ我く紅葉そう 蟬衣 芭蕉
天酒をそそて物うさ袷ゝる其角
初袷をぐに着ぬぐ古工郎 移竹
誰もゝくゆたのつせの長初郎 立圃
たゝりのもかろさふうつるの衣 十摩
長袖ふまかるすかるゝ袷ゝ西鶴
一日て花ふゝくしき袷ゝ那 思貫
衣ゝ紙巾一ツ出来ゝ之道
狂 ぬきそゝゝふゝくもろゝや
花ゝゝぬぐの袖衣ゝそて入安
夏衣のゝゝふゝを絞をぬゝゝハ
魚の腸りやゝ外れるゝん貞徳

青簾

殿 青葉簾とも云今日より殿ま新しき御簾をかけ

司 續拾遺 土御門院
ひまゝゝそいそ初せん初をぐれ
ゝゝゝりかるゝゝりとを
俳 長袖ゝゝろゝ長袖ゝ青簾 嵐雪
袖ゝゝて内そ涼しき青簾 虚白

主水司始供氷

四月朔日 九月晦日

天子へ氷を奉るゝり延喜式に出ゝり

孟夏旬

夏季の改る始ゝ臣下の政を聞しめして御酒とたび扇を頒ち給ふゆへ扇拜も云今ハ絶ゝり 公事根元に出ゝり

式 年中行事哥合 殿中將
法人のけゝゝ神ふゝゝ
仰ふ扇の風ものゝけそ

風爐の茶

三月晦日ゝ炉を切朔日ゝり風炉かゝる

京

貴船神事 近江 筑摩祭 鍋祭 も云此里の女
嫁入ぐ鍋をかづいて神事ゝ出再ひ
ゝゝ入とれゝ二枚ゝ紙幾度ゝそも男
ゝちゝる数裡鍋をゝさ奉ゝ 或ハ初午の日ゝ
俳 搭ゝて鍋ゝかゝるゝ虎貫

二日

京

調子村祭 山崎の近所ゝ
圓明寺小倉大明神祭 能

三日

天氣

今日天氣晴まゝ夏中風雨順ゝて五穀豊年也さまにようて米を商ふ輩四ゞ三と唱ふ

禁忌　此日一切の血を見るゝ忌いむ

京　△山崎日使　山崎離宮の社人行列を八幡へ参る　俗ゝ長者形といへ　○宇治黄檗開山隠元禅師忌

近江　山王神御出。夜半頃大津四の宮へ御出是山王のおゝびゝ祭の日神幸のさゝ大津ゝ大宮の拜殿ふかゝ〳〵入き奉る

上卯日

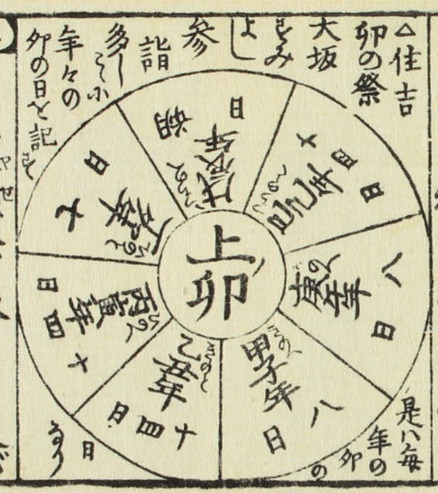
京　△稲荷祭　此月卯三ツあれば中の卯日ゝ　弘法大師東寺造営の時稲と荷ひ来る翁ふ現ーゝふ神ゝ初午の前後今ようたうだ　是稲荷山ふ鎮座の時大師其面容を自らきざみ給ひて神事の最初祭をゝろ神輿ふかゝる面ゝといふ

大和

△大神祭（大神と三輪の神ゝ大物主の神の尚ゝ）　宗信法眼

年中行事

我君の治代やさくへ行ふも　おほきの神のまつりぞはけ



上辰日

京　△八瀬祭　辰三ツあれば中の辰日行ふゝ

上巳日

京　△山科祭　○北山茂登岐明神祭　△久世祭　三ツ巳あれば中の巳とりる

近江　△多賀祭　△堅田祭　○三井寺　早尾祭

上午日

京　○北山イカダチ明神祭

上 申日 **京** 三 年中行事寄合 二倍中將

△平野祭 貞観年中

柳ゝる水月まれし山人の
面白の花ふゆゝろゝせり

大和 △當麻祭 **河内** △森祭 **近江** 梨祭

上 酉日 **京** 三 年中行事寄合 貞世

△松尾祭 貞観年中

姫さゝ塚さゝ松の尾山のあけぼの
いくゝゝ代ゝゝでさゝまあゝん

△梅宮祭 橘氏の祖神

三 年中行事寄合 秀長

神あるゝ水月の柳ゝうそて
梅の文みふゝあるゝ山桜

河内 △當麻祭 上 亥日 **近江** △大津祭

四 不成就日 **天氣** 今日雨降 五穀貴し **南都**

△水屋能。四日五日あり 地人能と

大坂 天王寺講堂の結夏音楽

大和 △廣瀬祭 △竜田祭 右両社同日

ゝ祭りあり大忌風神の祭と云

天武四年ゝ風神と名タツタタツノ祭り大忌
神と日廿野ゝまろゝ日本紀ゝ出ゝ
風水の難とのぞく豊年といのる神ゝ

五 日 **京** 神足祭 六 日 **江戸** 目黒祐天寺千部修行十五日と

七 日 **擬階奏** 是ゝ二月ゝ列見して六位以下の藝能ある者を撰て式部兵部の二省ゝ
ひきゝそまゝゝる紙上卿升遼を
札ゝ記ゝ置きゝ今日持てまゝる
を大臣ゝゝ取て奏聞せゝゝと

大坂 住吉小 八 日 今日弦るへゝま祭 とゝゝひゝ出るゝ

天氣 未の刻大風と雹昼雨ゝれば
豊年ゝ夜の雨ゝ宜ゝずゝ

禁忌 遠行旅立をるゝ悪ゝ
○草木を切打ゝといむ

灌佛 △佛生會 △浴佛 △佛の誕生 △龍花會 唐ゝも寺ゝて五香水と以て佛ゝゝゆゝゝす

〈花ゐ堂〈五香水〈つじ仏ヱ奉ル
○五寸六歩の釈迦の像を造り金乃
鉢の内へ金衆僧法を修す是世尊
生誕ゑ時天竜産湯を奉り象こ
(ゑ)年中行司 咲胸 四月の久とかぞへ
きい多ろ久しき法のえるをさ
(俳)麦飯と毋たゞをて仏生会其角
せろゝんの虫のやゝ丸法 左の音とせろゝんの花へこゆまよゝろべ
(ゑ)とーこれ多月八日八吉日よ
かゝさけむーのせいもいとまる

京 〈山崎 天王祭○大原
證據あこぐ堂参詣 大坂 住吉
大常會○天王寺講堂佛生會午刻音楽
○同所太子堂結夏開闢刻午下

山城 比叡山花摘 ○戒壇堂
開帳○水無瀬祭○かいで
光立寺 開帳 南都 興福寺佛生會
侍人舞楽○音楽金云
修ゝは長ゝ

大峯山上 今日より始て上る戸開
ゝゝ九月八日まで

役行者この山の岩窟ゑ鉦剛胎
藏の法を修ゝ千百余年かゝる

九日 京 清水寺 十二月 不成
〈地主祭 就日 天氣 晴天い世豊へ

十四日 天氣 晴天い豊年多り諺云
今日黄昏時分と見よ
日月對ーて〜せい秋畢多り
東南風い豊年ゑ多り

伊勢 〈神衣祭 麻績連麻うゝて
神明ゑ奉ゝをいゝゑり

大和 〈練供養中將姫の忌當麻寺
ふて行ゑ真言浄土兼学の寺へ

十五日 夏入 佛家ふて一夏九旬と云
て今日より七月十五日迄
禁足ゝると夏ゑ入ると云ゝ夏
い地ゑ草繁茂ーー虫多く出来
るを踏殺さでゑゝゝ是を安居
と云ゝゝ 夏十九丁出さり

京 五山東拂 一山の衆徒を集め
禅師拂子を取て高座ゑ登ゝ

偶をゝ諸禰師に問尋せ給へ
○東山新熊野大般若轉讀 年ごとに修行へ

江戸 小松川善導寺中將姫の筆阿弥陀の像 兩帳

大坂 天王寺塔會千の刻に行ふ
昔は天王寺と村とう鉾を出
祭りあり其時の祭りもの馬具
面人形をゞ村々社内おさめ有とへ

天氣 雨ふれば豊年○暮時日
月を見ふ相對して照ら
せば秋晴あり○月のかるゝ早
くして雲は紅色あれば大ひ
でりあり又月のかるゝに
そくして白きい雨とつゝきざる

十六日 **京** 安珍寺鬼子母神祭 三井
と同じく今日修行を

江戸 杉交稲荷祭礼 **近江** 三井寺千團子祭
願ある者はんごと千こらへ鬼子母
神へまゐりまるとゝ参詣ゝゝべりゝひ
くるようり千へんごとゝ

中子日 **京** △吉田祭

中辰日 **京** △向日明神祭

中午日 **京** 下賀茂△御陵祭 **大坂** 玉造稲荷御出

中申日 **關白賀**

中酉日 **加茂祭** 上加茂△御神○下加茂の神躰

中戌日 △近江八幡祭 蒲生郡八幡村に在
後世三至り移る杉山祭神石清水同

中申日 加茂△國祭。如茂社は山城国の地主
故今は祭は国の者ら祭る人は絶た
り乃日の祭は勿裏ゝう祭らせ玉ふ

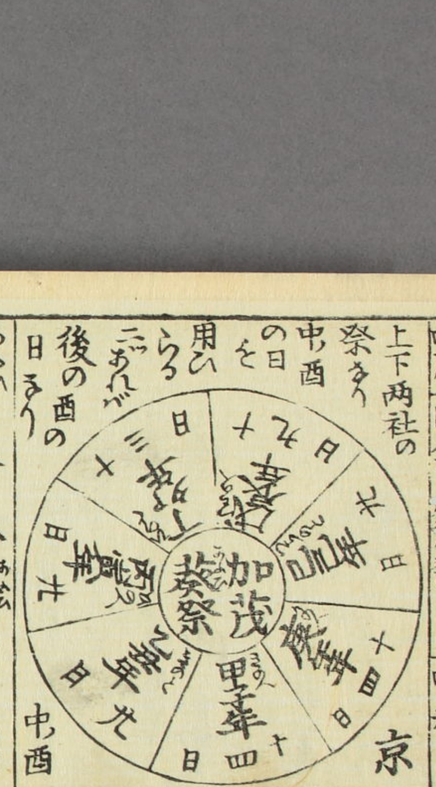
近江 坂本山王祭 (相) さて治やむ
うゝゝるゝゝの私ゝう風鈴軒

近江 △菅宮祭
祭神三社へ

茂詣 御車之地下殿上人前驅之
あづま遊び駿河舞をと
の神事あゝと公事根元が出さう

御祖の神ゝ△祭りとさう
いへば此祭りゝゝかゝるゝゝ

上下両社の祭り中酉の日を用ひらる二つあれば後の酉の日なり



葵祭 今日人々葵のかつらとかざるゆゑなき世俗葵祭といふ

御形日 御生とも書 今日加茂の神生まるゝ日なりと

葵桂 諸鬘とも云 葵と桂とさす故諸鬘といふ葵い静原より取来る桂は松の尾より伐り来る諸のかざりとす

菅笠檐 大きなる笠とさし荷ひもてる行列あり

(考) 夫木 ちはやぶるかもの川なみ 後京極

(考) 年中行事哥合 頓阿

神山のあふひを葉にたがはにらのこるさくらとかざしけん

夫木

ちはやぶる神山の形のあふひ草のかつらにかけよとぞ思ふ

西行

(詞) 神も焼し。添ふたの川のかつらひ系の山のふもとに社をやすみあまの山の名をとりて神さぶるかつらの名をとりて神さぶるかつらの名をとりて神さぶるかつらの

霊尊一座と云云むかしハ平安城鷹峯東ゝ社あり〜と光仁天皇御宇天應元年釈の慶俊今の霊地なりし奉るなり神輿ハ山下清涼寺より出つ土人の女屋臺ふて舞ひ或ハ傘鉾を出し風流〜△中山祭　中の酉の日　冷泉院にかゝる砥神これあり　天喜元年四月なりもゞ光そ官幣と奉らると云是中酉日なるべし

東照宮御祭　日光山その外

諸国ふあり○紀州若山御祭殊ふ美麗〜△和歌祭と云△雑賀祭とハ

廿日　天氣　東南の風を真風〜〜大豊年とす

○南風ハ旱　西北風ハ洪水　東北風ハ水　西南風ハ平なり

十七日　大和　東大寺擬戒使

京

泉涌寺雲林院　如法経會九月九日まで

廿一日　高野花供　紀州高野山ハ弘法大師の像の御衣をかゝる是を花供とゝハ今日高野金堂ゆゝ學侶の僧藥師會を修行〜花を供ぜるの日と大師の御衣をかゝる日と同日なる也とそ

廿四日　伯者大山祭

廿八日　天休節　不成就日

晦日　夏駒牽　○小の月なれハ廿八日ふ行なる

天皇武德殿ゝ出御あり庭上ふ御馬をひき渡を白馬の節會のゆゝ此ハ来月騎射の馬射人をゞ御覧せり

陶あり貝観の頃よりはゞ先らる猶延喜式ふくハし

○北野御神事　清栢御供を〜〜

○新日吉祭　今日廿一日八五月

月令

此部ハ日の定まる四月一ヶ月の事をもちゐ

神祭 此月神事多〳〵名をさゝぐべき季にあ

齊刺 神祭せんとて松竹榊みどりさす事あり

(三五) 金葉

かゝる春の月のそふにこゝあてもぐりこあれの花をもあ〳〵

榊取 △榊ハ次 是こゝる祭乃なぎりこ江次弁に委〳〵

(連) 神仏ゝるゝふあひく榊ハ宗祇

三枝祭 卒川祭をゝゝゝゝ

△三枝の花と酒樽ハ

ざる故いつ神祇令ハ夏の祭の所ハ載らる (三六) 年中行事哥合入道大納言

あふのゝ三枝の花とゝ宮や神乃はまへよ古酒をゝゝん

茶誥 宇治より今月挽茶壺へ詰めるあり上品と鷹の

凡そ銘ハ極上し紀を拾匁袋

ゝて壺へ詰めるゝ極そゝ中そ

ゝ中ハ次ゝる茶うそつめ封

ゝる又其次ゝる茶ハ上を初むゝ中と

中むゝ下と後むゝと銘を是ハ壮匁

袋ゝてつゝるゝそゝて濃茶に用ゝふ

ちつゝる次ゝる茶ハ薄茶に用ゝ

今月諸方へ出ゝハ茶事ハ風炉

の時節より炉と重ゝるにうて

此茶の口切ハゝべていの方にて

九月より後ハゝるあり

(○) 弘仁六年江州志賀にて崇福寺永忠僧都茶を煎して奉る

ゝあれゝ其時ハ日本ハ茶ハ

皆唐茶ゝり唐仁寺の梁西

和尚宋ハ入て茶のゝゝと得た

ゝ明恵上人ゝれと栂尾ハ栽〳〵

ゝゝあ後く日本ハひろまり

ゝゝゝれゝゝ栂尾と茶山

ゝゝハ栽〳〵所と深瀬と云て今ハあり

煮酒 京師是と酒煮くゝみて酒肆あるひとゝ
ずゝ〜ひまゝに飲〜む是を酒煮の祝ひといふなり

矢數 大矢數〜も云 洛東三十三間堂にて此事
とゝ〜ん弓の天下をとるふ矢を通をゝくむ〜より四月
中旬ふ極まれり日のあゝたゆへなるべ〜

松前渡 商人蝦夷松前ふ渡る冬春い寒氣強く
渡ゝ〜ぬ故此頃渡り秋上るゝ

能 ゝゝて私の日為の鰊等水

時令

此部ふい四月の時候ふかゝる事とあつむ

首夏 四月の異名あれとも
その只夏の初と云意〜

歌 新古今 素性法師
ゝ〜ぬ春もあつりのて

いとゝぬゝてる夜ごろもうゝ

建保百首 定家
大井川かゝ〜ぬゝ世にたゝをの上ゝ人
なつゝさゝゝりと衣あらんなり

新續古 首夏風 左大臣
吹風も移やいとゝりん花の香の
うゝをたゝりゝゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ

詞 ちる花。夏の空。氷。ゝ。清。みどり。若葉。ゝ。ゝ。こむらの袖。
きゝのゝゝ。ちり残る花。青葉。
夢ゝ〜ゝ。卯月の始め。梯。
春の併。ゝ。月。
能 年ゝ。卯月の終り。菱の実。
むゝゝ。若葉。ゝ。卯月。移行
狂 ゝ。二月。ゝ。ゝ。吳竹の
数。ゝ。夏。ゝ。

詩 首夏五字對句

清和 ゝ換ル衣 風光夏葉初

幽僻還聞鳥　花落春鶯晩

詩　首夏七字對句　詩礎

西灣水綠堪銷暇　列樹雲色黛

南浦花紅好送春　艸綠春

明　郭亨貞

詩　首夏之詞

巡簷燕子掠晴絲　隔水茶烟出院遲

燕メノ片々ト飛ブハ晴天ニマガフ川ムカヒノ茶ヲ煮ル烟ハ風ナキユヘオソク立ノボルナリ

人不到午風吹暖夢回時青草夏ヲ

盛リニハエレゲリ人ノ来ラサル処ホド繁ル午夢サメル折フシ風ノソヨグナリトソ

和清天

△梅天。ゆきも四月の時候といふ。樂天の詩ヨ孟夏清和天云閑文多くして又清しといふ

○源氏胡蝶ヨリ

夫木　小大進

雲ぬれて月もみ波る夜の夜い
ふり〳〵ぞ多く水色乃そ

卯花朽

△頃日の雨といふ卯の花をちらし〳〵しをす

きり哥ヨハ三月ふり五月にをちらり連俳ヨハ四月ヨリ

(詩)山里の夕の花を手にとれば垣根をとまる山川の多　後京極

新暖

△四月の頃ハ日々ふるに新しき暖といふ

○お俳ハ夏の首　古来長

短夜

日と春と〳〵短夜と夏

〳〵長夜と秋〳〵短日と冬と

四季ヨリ多ち用ヒて俳偕の差略ヨリ

長日

唐の文宗帝の作り多い〳〵

(詩)人皆若炎熱我愛夏日長と殊ホ頃日未熱ぜず愛ヒ人さ日く季ハ春ヨリ

時衣

△若楓衣　小千草色

△卯花衣　おそ〳〵はあい

曜麦衣（うくいすのあいふぐ）
おろも（かるそへはきてあいぬきハ黄なり）

草木

爰ふハ四月一ヶ月乃ゝさ木とあ川む

餘花（のこりのはな）〈青葉花 残花。春ふおくまて咲のこる花〉

（万）新拾遺

別てのはるべくもやゆく春の
月数よ花のさそ残ら餘るらん　　内大臣

家集　山餘花

ちらせるる春ゆくやふるげ乃
まを葉ゆ〻づひとるのむ山本　　雅有

続古今　残花

搖くふ薮ゆうぐいひ〻〻〻
花ゆそ〻〻〻ぞ去い惜〻き　　後頼

（詞）枝ふすくるさ添さ木ぐ生。
弟葉ゆ〻ぐ。まれ花。風の待す。
薮待ぞ去ふぬぞ。ぬ入る山

桐花。白桐。黄桐。紫桐。椅桐。是皆桐の種類〻

梧桐（あおぎり）桐ふ似て皮青く疎皮ぬ日月の関を知るべ〻都十二葉あり下よりかぞへて十二葉の中に小葉あまい其月閏也鳳凰乃栖い此桐なり

（万）　　寂蓮法師

百敷や桐の指ふとむるの
ふ〻せい井の色もかゆし

（俳）移ふも咲て見せる桐ハ来雪
厳造り英ゆてゆし桐の花　其角

檀花。杜仲。思仙。木綿。

（万）　　顕輔

若のむす岩ゑ花まあ色ゑ
見と嵐ゑ吉〻せどもくあ

枳花（からたちのはな）時珍曰葉い橙のぢく木橘のじ白花をひらを

（詩）枳穀之詞　　雍陶

澧水橋西小路斜（ホソイヨコ道）川ヅタロニ
日高猶未到君家（オタクヘ行ツカズダハツスギ）

村園門巷多相似 ザイヨノ同シヤウナイヘナミ

處々春風枳殼花 キコクノサイ久野カゼアタヘカイ

△蜜柑花 大和本草ニ其花ヲハナタチバナトモ名クト云

△柑子花 ○花柑子ニモ云 ㊂ 夫木

山程ハいとゝ多く人ハ

△伝て後り嫁き花柑子ハ 慈円

△乳柑花 ○久年母ノ花 橙ニ似タリ 橙花 正月 医

△柚花 樹葉皆橙ニ似タリ 花甚香バシ 金

△柑花 白花 △雲州橘花 花白

△佛手柑花 実熟シテ人ノ手ニ似タリ故名ヅク

△橘

包橘 △盧橘 軒生 草 昔州 庭古州

△どうよ花 ○橘ハ柑類ノ惣名也 だいだいくさうの類もべてこうらいなる

なり世よたちばなる 弥生 三方沙弥

包橘なり ㊂ 万葉

橘のかをるむかしたちのやまもとに

ものとそ思ふいもにあなとて

新古今 通真

彩雲はあかねさしてうゑ風に

なりしなりたむ富のこうち花

同 家隆朝臣

今をさかり花咲そひろ之花の

いとそ昔の香ふ匂ふ春

家集 風静盧橘香 清輔

君ゝ代よ枝もたゝさて吹風に

ちる之花の白ひらそ〳〵ふ

夫木 閑居橘 光俊

たちばなの花ちるいとのかゝ

のゝ〳〵中〳〵ふかうとそ人ま

同 夜盧橘 如願法師

ちる花ハ紙ハ人ハりなるとり花ハ

をゝ〳〵ろのこゝふ白ひとちる

同 里盧橘 隆祐

ちる花ハひとりもとゝ紙をみちのくの

花のゝ人ゝとゝ白ひとちる

(詞)旬に咲ちるさくら　神の手ふれ玉へる　ぴ〜ぴ〜　梅の花　ぴ〜ぴ〜

(俳)荷旬に花さく実ハ体はス　其角
雨ぞ降て橘のさくもりと　尾貫

(狂)陳皮よハ〆ぬ先より立ぬの
旬いとさくぞ丸ハ茶ゐる　良穂

(連)橘よ〆〆くりべ〜あの風　宗祇
三つ花ふまゝ丸旬にさくらさい特花
古里。彩塔。五月雨

(詩)橘五字對句

楓樹隱茅屋　白花如霰雪
橘林繫漁舟　朱實似懸金

(詩)仝七字對句

銀章自謂人臣力　歲寒心

詩礎

玉液誰知造化功　度玉岑
珠顆形容隨日長　處々紅
瓊漿氣味得天成　嘯橘林

厚朴花　葉擬の葉ゐ似て鋸歯ゐ大ゐる物尺ゐ及ん花女郎花ゐ似て大ゐり秋実紅く熟さ千年蓋の実のじ

秦椒花　山椒ゐ多く味ひつく物ゐ多く干て食ゐ

櫻櫚花　花の初魚の孕む子のぶ〜是と櫻魚或ハ櫻筍と〆漸く長〆て花穂とゐて淡黄色ゐ

(多)夫木　為家
切きぶ丸梢ぞ〆ろ〆ハ春ハて
ところの茶ゐるろ　るもしぐるゐ

(能)掃ものゐ日和く　梭掛ゐ度

椒相の皮一年に二三度あらひ四度剥べし剥ざれば皮と剥ぐ葉付る所長ぜざるゆへ所より剥初る葉の付る所中にあれば落かゝる時あし

椒花 正字柿

○椒か七ッの妙あり一多寿二多陰三鳥の巣あり四くい虫五霜葉玩び六実多七落葉多くはて文字と成べし右を柿の七絶と云

榎花 俳 乏家て乏の花も絶と云

夫木 川端の岩の根の榎の葉もわびしきち行人の宿ぬいなし　為家

槐花 今月花咲 実は秋く

卯の花 搗の花

異名 白荊花。錦帯花。空疎。楊櫨花。夏雪中。垣見中。卯の花草。雪見草。初見中。つぎざるの中暑ゐ。箱根うつぎ。十妙妹。花いろ〳〵さまざまゆへ名づく。△岩本うつぎ△里うれぎ

白河院

㊀ 新古今

卯の花のひかりくさけるはかをべきるれ月の影ぞえるる

太宰大貳重家

月卯の花咲ぬる時は白雪の波りてゆる垣ひとそうる

後京極摂政

夫木

里人のうのそなめてゝ月と宿るのむらゝとゝ

家集 水辺卯花

五月川ゝ水まさりを見ゝ花のおもかのみゝにまりゝ卯のを

西行

家集 卯花似夕顔

家ちゝ見ゝ花ゝ夕顔の好ゝ月ゝ

医房

夫木 卯花似月

久ゝの月ゝ卯花ゝ月ゝ

為家

嘉禄百首 河卯花

為家

久しの水の河乃卯花
月の行めぐりぬる夕くれのそら

五社百首　暮見卯花　俊成

春ぞふるのこるこゝろの追風に
消せぬ雪さる山の卯の花

夫木　湊卯花　定家

かへるさのゆめのいさこそふく風に
あらぬ浪たる岸の卯の花

夫木　舟路卯花　家隆

うれしかるなみの花の浦人を
袖をかをるとふるよせてかな

明月　山卯花　教定

秋の花さくらたむけとおもふ緑
うのむさけるゆふのしら雪

夫木　社卯花　定家

あさとる三のそのやう屋
ゆふかけてちるかくるうのそる

鳥羽殿哥合　田家卯花　俊成

小山田のありそうくるかけて
月まちまの花はさうくそ

夫木　卯花繞家　寂蓮

卯花むのかきもの
いでめるらぶにめそ

金葉　卯花連垣　匡房

いまをさりかてはまし山里の
垣根ちくさに咲るうれそる

千載　遠村卯花　政平

うれしるのそもめくり
かきよぎりの卯花

後拾　山家卯花　通宗

絶て来る人もなるれ山ざくら
我のみなよと咲る卯の花

詞　名目　月明　山　雪

うの咲ちる白ぬ雪
ぐ月　山里の垣ぬ露
の月　山陰社雪　ぎけふまうる
間おう越の名野　うき京　今まよ
川さ〜せる布ぬ　ぬ　冥の波沼
のまろ〜こ　はの雪　雪海　卯の花の名
雨　卯のむ〜〜　卯月の名　時鳥　卯の
花の陰よかの屋　卯の花　ふ屋ぐる
木陰　木のるりる　きえ残る雪　森

麦の下ケ　垣ちかづが垣　ひかげの垣　卯の花垣　うゐき垣

連　おらが世とうれむのさうれ　宗砌
卯のむかしたづねる垣やれ　宗春

俳　卯のむやいつまのはのかれ後　其角
中垣ひはも腐つ花うゐき　井蛙
雪ねむ一夜にふるる卯花垣　貞徳

狂　卯のはいかのあるうゑわつ白雪と
きふネ審のきやなつ〜ん　貞徳

牡丹（ぼたん）

異名　本草菜　魏花　鞋紅　姚紅　姚黄　国色　天紅　魏紫　馬紅　裴白　鼠姑　紀羅老　紫葉　庭紫　牛家黄　状元紅　二十日草　深見草　名取草　富貴草　鎧草　花王　草庵

數椿（やづつき）

五月女　負の條　お春し

詞　頓阿
咲ぬ人くうなれそい多の袖うゑ家
さ〜でもの人の花ふるる春ふ
玉葉　愛牡丹　師兼

紅なるあかそむる色もふうゑ家
枝〜うしあるむの色う卯

詞　花のとり〜大紅旬ぶ色
くう。春ぶさ。春ぶさ。
咲。哥よい春之連俳ゑ夏ゑう

俳　ふとそ春ゑむ春うや北日素宗円
八ゑるとうふ春ふ牡丹うゑ其角
牡丹ゑ春ふ春ふ牡丹うゑ移竹
山家ゑ春ふ春ふ春ふ春ふ春ふ

狂　花い撞解いとらやうふ〜ふ〜ふ〜ふ
こちい富ゑの花の月うつく　紫円

詩　牡丹五字對句

詩　牡丹五字對句

未嘗貧外見　異香開玉合
不似地中生　軽粉泥銀盤

詩　全七字對句

曉艶遠分金掌露　正開時
詩礎

暮香深若玉堂行　浅復深

群芳盡怯千般態　有此花

幾醉能銷一番紅　醉數杯

詩　牡丹之詞　唐　李太白

名花傾國両相歓　常得君王帶笑看

牡丹ノ名苍ト傾国ノ美人ト両ツナガラ君王ノ御気ニ入ル故常ニ君王笑解ヲフクミテキゲンヨク向アトヅ

釈春風無限恨　沉香亭北倚欄干

此両品ニムカヘバドノヤウナ恨モ忽チニウチワスルベシ

詩　飲酒看牡丹　劉禹錫

今日花前飲　甘心醉数杯

苍ヲトカメテ終日酒宴ヲナスナリ

但愁花有語　不為老人開

苍モノ云ハズタトヒ物イヒ語ルヿアリトモ我等老人ノ為ニハロハヒラクヿジキトナリ

牡丹肇　花王　錢思公カ説ニ白花ヲ第一トシ紫花ハ其次ナリトト云ヘリ今櫻ヲ木ノ王トシ牡丹ヲ草ノ王トス

況香亭　唐ノ明皇ノ牡丹ヲ栽ラレシ御殿也

白牡丹　花潔白さして愛でゝ

（狂）惚れ〻と待まい惚れ〻とくべ〻

とく牡丹ハ白さ極まる　貞柳

詩　白牡丹之詞

長安豪富惜春残　爭賞新開紫牡丹

都ニモ春ノ名残ヲオシミて牡丹ノ花ノ開クヲワレ〻チカ子テ賞翫スルゾ

別有玉盤美露冷　無人起就月中看

白牡丹ヲ白銀ノ盤ニ見立テ作レリ

白牡丹

種類 三国。五重七重花びらあつくはやあり

○芍〻菊。五重大ぶん○白縮。六七重大ぶん○出雲。六七重中ぶん

○香久山。三重大ぶん○袖の雪。大ぶん二重そこ〻うるこあり

紅牡丹

種類 染井。大ぶん濃紅うあげかさ○多〻

○筑前。中ぶん色濃七八重いろ蠟紙べやをぬうるこ○志ほ

風大ぶん薄紅うの紙ぶんもの

ときくをたるこ○朝日山大ぶん

五六重尤咲○見越。濃中ぶん八重

○妙覚寺。大ぶん四五重○廣沢。大

ぶん四五重○猩々。大ぶん九重○

待夜。中ぶん重う○山里。くれ

紫菊さい○大紅。大ぶん黒紅ぶ

ちぶそ〻すこう一尺までの舌紅。

中ぶん五六重紅色うの○濱紅。

大ぶん多〻○小泉。色中紅さなと

花さいてこれをきかうあるあり

芍藥

異名 將離。花相。犂食。餘客。和名△ゑびす

草。かやよ州。秋根をとりて藥用とするあり

能 芍薬の四ようや薬ものの弟子 立圖

芍薬の骨打ぶゆる形ある弟 移付

狂 咲ふりや牡丹と百合のゆくよ

ゆゆ出ぬ芍薬の花 常繼菴

詩 芍藥五字對句

幸因親切地・孤賞白日暮

還遇艶陽時・宣風動搖頻

詩 芍藥之詞 唐韓愈

浩態狂香昔未逢紅燈爛々

緑盤龍 昔シヨリカヽル色香ノ風流ヲ見ズ花ハ燈ノキラヽカナル如ク葉ハ青竜ノワタカヽル二

似タリ　来獨對花情驚恐知
在儼宮第幾重　カヽルメヅラシキハナハ仙家ニテモ幾重ス

芍藥名花　○関寺。皿三重紅の中ふ黄うこん交り○小夜雨。皿三重隨分白○金孔雀。皿二重かゝ紅○白砂金。白三皿重○たくき。薄紅二重花中うん白ー○錦木。皿紅三重りうあゞ横色金

杜若　燕子花分かよ花分つゝと○本邦久しく誤て来れり此花の正字馬蘭本名い茄実なり

杜若い香草なり

(哥)　建久百首　定家

かりごろもすそ下ぬれてなれにけりつまとまけてあさるさゝ舟

拾玉　杜若写水　慈鎮

杜若うゑけむかつれをなみゆるるあとといそなるそゝ

山家百首　水辺杜若　神正

彼ら伊山下あのかきつばたむくえひ深乃色ふ咲々り

○哥の部立ふ立ふ立つゝと春ふ

○哥の部立ふ立つゝと春ふ

なり連俳よい夏なり（詞）沼。

山下あ。橘衣。ゝ衣。ゝる。

名所い。伊右。八橋。志賀。昆陽。

廣沢池あ。肥沢。花うゑむ

（連）あと知てあよりほー杜ふ宗春

（俳）養まあ赤ふ挑る杜ふ其角

あの見門挑て行ひふつゝ信徳

まるくゝ花のむむ杜ふ林鴻

（狂）あてゝくふいのあやめ行つゝ

似ゝうや似ゝうゝ似ゝ多雄長老

まゝ花とふゝとうゝを竹ゝゝふ

一そいゝうゝぞかゝゝ

ゝゝこう郎　信海法印

杜若名花　○鷲尾。ゝうこん中ん白ゝぢ○羅生門。ゝう黒ー○橋姫。ゝうれゝさ

○濡鷺。ゝう毛ゝだ○薄雲。白ゝ

むらくうとう○八ツ橋濃ひさき花首ゟ葉一枚つゝ出る莖一本小三返つゝ咲くものゝ肥さるい花四つ五つも咲一番花二番花こゝゝ

知母花 花く一八の花 異名 青さ

紫羅草 鳶尾 和名ゟ余罰と書ゟ花紫ゟて杜若ゟ似ゟ

覆盆子 種類○蛇母○蓬藁○麁○樹母△草ち

ご△ちゃいちご△はるいちご△べゝいちご△きいちゝぺべて夏花さんちゃ

王孫花 異名 長孫 芥子花

○海孫

一名 米嚢花○鼈粟花○象穀○御米 能 けゝ

ちるあとの須弥いくゞ其角

ゝ一ゝ名ゟ合ちるけゝ坊主宗旦

宿行と上ちゝいつまけゝ其角 訥子

阿片 ○鴉片○阿芙蓉○阿片

けゝの花の津液を

ゟて罌粟青莒とむをぶとき

午后大ゟ針とりて其外

の青皮とさゝ裏面の硬皮を損す

ゟるゝゟれ次の早朝津出るを作

ゟそこをげ收て瓷器ゟ入て陰

乾ゟて用ゆ名方一粒金丹ハ是

を以て製を尤

躍花 續斷 花葉

久浮の妙薬ゟり

のゟれ生ゞ人笠を

ゟて躍ゟ似ゟ肉て名

白頂花 異名 滿庭枝。少一丁香の氣ゟり故名づく花白く小さ 擔滴下ゟ植る

風露草花 花白梅のゝとし

梅蕙帥花 白

王不留行花。金盞銀臺。花藤撫子ゟ似ゟ

俗ゞんゝ艸とゝ

羊蹄花 和 大黄

車

前草花　異名　牛遺。牛舌。車輪菜。花穗ごと

文字摺　名いまどつまびらかなる事

靈光草花　鷹爪。花黄へ畧緑豆に似たり実同

山菅花　白き小花

風車花　白花淡き紫を帯ぶ

繡毬花　白花集咲て多くあり

岩梨　三月の小花

石藤　紫藤に似たり紫白の二種あり

夏枯草　葉すこしの如く花紫あり

宝鐸花　花鈴釵のまゝ倒に垂る青白色あり

鴨足草　異名　鏡面草。虎耳草。花淡紅色

茨花　薔薇。牛棘。山棘。牛勒。実を營実と名つく　野生に紅白二種あり人家に栽るもの花の形色数品あり

晉六帖　採れけさうひそかつる花のらんぬあさすのくいんへかりくり

千日紅　花の盛り久しくして百日紅に勝る故に名づく

青木花　花紫黯色にして美なれども葉常盤なり

要花　扇骨木。正字未詳　小白花をひらく其樹最も堅硬して扇骨とす故に此名あり

盧陀草　誓婆三礼草。近世南蛮より来る

新樹　樹い植物の總名なり新葉の薄翠なるを云

新古今　曾根好忠

花ちりし庭の木ぬれ同も春の名残の新ぞもれる月の

夫木　定家

うけ志々紀る〻のえうの月ぞして
まくとうの乃えそすくさ

玉葉　庭樹結葉　院

をるて植みくりふうりぬまに
松のくゝせもまうゞざりくり

新續古　山新樹　左大臣

それ〻ふもゝせて春きゝさく〻
花〻そ反の木志るりとと

詞　さるゞ〻藏る。祇園の長。
山の葉。茶摘。玄葉。反本立。月
りゝぬ庭。るゝのひろ葉

若葉

新樹ま同し一諸木の葉の若やうをいふ

俳　三笠山貝ふ命ることを若紫引　稜竹
淵の形色三井の若紫うる　松南

わゝ〻葉

。病葉さいふ。若葉の内まれに赤く又い
白くあるひい黄いろ　いもぬる
といふ遍遍といふ支いてけゝわと云

木草茂

草木の繁茂をいふ
茂草　蔚林をいふ

木下闇

。木晩。万葉さい木。
れ〻ゝむ木の茂る

詞　万葉　木晩のゆふ寄あるれ附る
いろ〻ゝ多〻ゝあれ〻ゝ〻ゝ

葉櫻

連　花の木ゝ〻れいふ
ちの弟ふる宗祇

俳　ちゝ樹ゝ〻るまれ葉さ一文鯉
坂さゝ〻やるまの人の春ゝり　希因

若楓

楓の字九月の所ふ注す。
八入ゝ称ゝるの若葉

紅色ふて四月青葉ふゝり其
外冬紅色るるの今月青葉と

詞　夫木
まゝりて染され色つく美楓
さもあ〻ま〻とるまあゝん　信実

連　いゝそも附る村る美楓宗因

柏若葉

。赤搗。若葉乃
色あゝれといふ

常緑樹落葉

冬葉の落葉
い夏葉と落ゝ

新茶 新茶製し　古茶 新茶に對して云

刀豆花 色淡紅　俳 然花ふる　ふるまこと豆のむの花羅洲

葵 二葉草。葵ふる〳〵日葵ふる　折まろ桂と酉の日加茂へ遣を加茂ふて葵はとゝ　そめ〳〵を　ふろう〳〵〳〵〳〵日蔭陰草日蔭の　ろ〳〵葵は日蔭は咲て日はあたらぬのふへ　〳〵　土ふて荒葵といふ　○唐　茂の山中ふ生を二ツ葉の葵あり　面書く裏紫色と帯ふる　上よりるごとく桂の木の枝ふつけ　て簾及器ふ注ふる　北山中村　より献る○葵の種類五月の分　立

旬 新古今　小侍従

いふるいそのゝ山のあふひ草　〳〵いそれども二葉ふる〳〵ん

詞 かゝ葵　葵草　葵　葵　葵　かゝ桂女。白花廣。車。翁さび。祇の

もろ〳〵月祇山。寥。曙。

俳 牡怪ふて葵の植迹　慶安

狂 ぬりくと葵の上ふ盃ふ　ふ見ふのもゝ〳〵ふ　貞徳

詩 葵五字對句

野酌勸芳酒　滿園種葵藿

園蔬烹露葵　遠屋樹桑榆

詩 仝七字對句　詩礎

山中習靜觀　朝槿　奈蜀葵

松下清齋折　露葵　祇綠多

紫蘭花 戀。花蘭のしと　紫又白もあり　葉ひろくたてもゝ

詩 紫蘭五字對句

拂軒竹氣淨　拂簾蕙風涼

茶挽草 蕎麦 穂あり。燕麦 麥よりも味おくる

俳 ふるゝぞまるもおくれ 茶引草 鬼貫

玉巻葛

○巻心葛○葉の芽出しの巻いろえ

俳 ゑびかずら玉巻葛 正安 来書

玉巻芭蕉 宗夏云 新葉未開の巻物巻葉といふなり

蓮浮葉 水面浮て生ずる云 ○葉未ひらかざるを云

巻葉 巻いろえ

俳 入月は蓮の老葉のゆるこそ 芭蕉

詩 巻荷之詞 唐 韓偓

侵曉衆凉偶獨来不因魚躍見萍開 曉ノ凉氣ニサソワレ来テ池上ヲナガメルゾ

巻荷忽被微風觸瀉下清香露一杯 フヨ〳〵風ニ巻キ葉ノ蓮ノフレラレテタマリシツユノバラ〳〵トヲチテニホフゾ

根都古草 針のごとく細き草と万葉にあり

豬殃殃 葎花〳〵もかく或を八重むぐら〳〵もいろ

詩 夫木 石竹の葉の形もうゝかなとよるゝく時る月のかをり 式子内親王

梅葉 俳 葉にかりて豆乃 乙 其角

麥秋 秋〳〵八百穀成熟の期 今孟夏といふも麥か於ては則ち秋なり故に麥秋と云

麥秋風

家集 俊頼

みそのふの麥の秋風そよ〳〵 みやこくきすのいなくなり

俳 る士起こるを見る麥畑 其角

紙化堂麥つく後と庵きく 公

麥秋も色のくゝ時や紅葉稻 正安

注 三夕の歌はかゝる麥秋の夕 ものかをはせり〳〵かりなり 如竹

[illegible]

青麥

(俳) 青むぎ[illegible]ち[illegible]き
そ[illegible]へ　末の國　鬼光

麥刈

立春より百二十日にて刈
と旬す但小麦八十日中遲

麥藁笛

麥の莖とり[illegible]笛
す小児の戯

○西行奥州ふ下ゆ一人の童子ふ逢
ふ僧ハ何国へ行玉ふと問ふ西行哥
[illegible]
[illegible]
[illegible]

人の思つる心ゆ蓮泥ゆ生ぜれば
泥と戀ゆとそへて奥儀抄
和名抄等ゆ泥くひる字を
こひちゝ訓をるゆ

竹筍　筍異名　竹萌○初學記　医衡
(河)夫木

親のこゝんむり竹入ぬよるゝと
竹のそれゝあるいろゝし

(朋)筆い皆祖師をれや東坡ゆ画李吟
竹ゆよい寿の徳ゆ成る斉ゆる久住
発侑の留とかむ滅ゆ郡　其角

(狂)筆を送りて　彩毫ゆ送ゆて敬
服ゆ以考いあるゆや竹のゆ徳を保友

(詩)筍之詞　唐李商隱

嫩籜香苞初出林於陵論
價重如金　タケノコノ出カケニハ
皇都陸海應無數　忍翦凌
雲一寸心　都ニモ卓山ニナカルベシ
翦ヲシキモノナリ

採筍法　朝早く見て露の上ら
ざるものをぬきとるべし露上る
ものハ大竹とゝなる
止魚法　竹根ひろゝるゝと
隣より出ゝて来り蛟
とゝなるゆ海帯を多く埋め
ど蛟方へ生ゝるゝゝ

淡竹筍　四月　盛出　紫竹筍　味ひ淡
竹ホ同一

美人艸　○虞美人艸　もゝの園　悪春
唐項王の婦人虞氏自死ゝ其墓ゝ上ゝ
生ゝる艸有ゝ人ゝて美人艸と云ゝ古文前集
○右の外説多し　奏しゝ八卯六丁出
(朋)ちゝくせう　乳の毒ゆ美人艸可申

篠筍　篠い小竹ゆて俗ゆ
篠ゝ呼ゝ
類多ゝ筍と皆篠子ゝ

(哥)拾遺　道昭
今い我ゝゝき老の坂ゝて
ゝゝゝ口ゝるゝゝの下ゝち

△櫻實　生い青く熟して赤黑
妙案　よく魚の毒とげを
(俳)実桜や　花ちるころは温故
実桜や　こそ通ろへりう　是水
花よりあるひとりの実　俊之　綿時　色き花
たゞや　桜の実　俊之　綿時　三月　桜木の部あり

種植　△豆植。黑豆。大豆。小豆　胡蘆蔔　移栽
石菖蒲。秋牡丹。枇杷。秋海棠。
桂。楓。杠。菊。　月うへ　晩又は鉢植　もるべきとは毎夕
水を　挿木　沉丁花。連翹。雁木。
芙蓉。木犀。柏。椿等

收採　蜂蜜　稀薑　紅花　蚕豆
桃仁　桑の実　麥

生類

此部まへ四月一ヶ月の生るものなり

郭公　異名　子規　杜鵑　杜宇　蜀魂
望帝　不如歸　百声鳥
王迎鳥　田歌鳥　早苗鳥　妻戀鳥
田長　もでの田長　無常鳥　夕影

烏　蛾背鳥　△勸農鳥　△くきら　△時鳥
(六歌仙)貞應百首　遠郭公　為家
作里にくるくるやひんかくきす
かのめ死くるくるうえけもちろと
常盤井百首　朝郭公　仲正
くるくきゆまくくもくて夜の光の
はるくかふとそるきけるうん
夫木　社頭郭公　大宮大政大臣
このとそとそふるけやろとやろうん
うれ神さひてちくかくちす
夫木　人家時鳥　法印印宗
ふるまつもの山の器の形くちす
ゆれむちくめ声るとーみと
弘長百首　雲間子規　行家
もくもものくくく

文殊堂の庭に霧ふかくこめたるをとうとし

同　里子規

名ゑよく花もものゝ実はなを
ゆまほとゝきすなくそとゝ

家集　山寺郭公　西行

時鳥きてはそゝとゝねと
こゝのをの山いたうみとゝ

詞　和音　和声。こゑ。歌声なり。くぐもり。ひと声。妻問ふ。かけこゑ。高の。高の。峰。ほとゝぎす。みゝ。声。夢の匂ひ。山。ぐぐ。ぎす。ぐぐ。ぎす。ぐぐ。ぎす

むしをあぶ声。人みな里とば
うれどこと四月ぞ人も時。古歌

月 ふくきは月ふるんあり　雨 ふをこのむ月のむしこめのあり出て
名れば雨の名おもをもくもむしこ　ふくあめちのくりよ
なく六月雨ふをちくりみくあ

早苗 一説ふやこくさなへ　ふりこうて民ふ農
よあり　ふりこうて
をすむるをふて苗不熟　ふくよつて
志での田おさくしふしこく　ふ苗こうわかし

鶯 ふこのういこの中れ新ふこく
田おさとむべもしのくり
くふくり考のふいこのやふ
かくこすすすろうしこ

恋 ふ待ちい妻ふ
ふふれ名ふれ
ふくだすふく声ふけ
ふこ

ようて恋ふよ也あり　ふやくこ
をわこさふくぬしさだまこぬ
ふどちあり新ふのかくれ
ふい恋を使ふようしこ

哀傷 ふ名ふい
ふよの
ふれ

ふより考ふとふ一説あり　ふて
恋つんやくおすふ名ふこのふ
懐旧 むしをこふる。むしをこふ
ふこのふ名

連 名いるく恋いふ　ふかくふ後　宗因
るふふようふしふ新七郎ふ　仝

俳 時ふとふ時ふ也て時ふ新ふ　秀吉
ふけ笑ふ家ふふのかくきす　清正

ふふふふりふ也ふふふこふ　曾禰
よふふ星時ふつふ方やかくふ後　其角

それふ笑ふ耳もふほとふ望一
ふそふふふくやふ田屋の新ふ　思貫

一僕ふ先へいふつかくぎふ　陸舟
新ふくくふ麻入りふふり　和調

待郭公

大抵待侘ふんよりふ

(言) 夫木　為家

せあてかふまつわふほふかくぶす
ふふふふふふふぶきく

連 ふふふふふふふふ新ふ　宗祇
俳 伯ふふふて我ふふふ家定

注 こふふふふ本ふふふ
ふふふふふふふふふ新ふ　貞徳

ふふ風ふ里ふよ保ふふぎふ
新ふふふふふふふ待ふん　宗鑑

初聴郭公

おほとよふふ

(言) 延久　雅冬

河ふいくふふふふふふ
ふふふふふふふふふ

連 初ふふふふふふふふふ新ふ　宗祇

注 ふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ

△郭公声 是覚つるさ心こ
(詞)白川殿 範忠
はるゝ〜で一声のゐぐらふ遠ざかりきる
まのいづくふ遠ざかりきる
(連)一声の月をゐ山ゐ〜やとくおもゐ
(俳)一声やとゐ毛式の山吉佐 伊當
(狂)あらまいぞ面るまいねとなくぞす
やすさりく今の一〜多 宗補

△夜郭公 月よよせてもよりあり
(詞)続千載 高遠
まぐろまゆゆどやめ〜遠郭公
ゐを秋ふくもゐさりてるゐ
(連)ゆゆ面のゆ月夜保くぞす
月毎〜夏ゐる夜ゐのゆくぞす
(俳)焼味ゐるゆ仏社小俺る夜杜今移竹
顧況

(詩)夜郭公詞
野人自愛山中宿況是葛洪丹
青西オクヤニヲレハコソハツ子ヲキイタ〜シテカツコウシヨクノヱ
庭前有箇長松樹夜半子規

来上啼 コノタカイニツガニハニアルユヘニ夜ナカゴロノホト、キスノコヱヲキクトナリ

△雨中郭公 多くあり五月雨とも
(詞)家集 雨中時鳥 顕季
雨ふいまるのとろれくぎ須
ゐくにぬまて鳴るとるゐり
(狂)雨の夜やゐ井のそこれ郭公
りて絵くふゐ一あり東陵

△名所郭公 多くあり詞の所ゐ出
(詞)夫木 中務卿
ゐ高ふひ〜のゐこれくおす
ゐのゐ〜ゐぬ絵をゐるくらん
(俳)はのゐれゐのゐ知ゐど郭公墨書
(狂)ゐ知ゐとう夢つ時ゐくゐ
かくみの池ゐ郭をうゐて英中
○唐士の郭公ハ多くゐ至つて
あゐまといゐ面ゐゆ待て聞と
欲をゐ詩ゐ作るも其趣なり

詩 郭公五字對句

杜宇呼名語 渚頻行客驚
トウヨンデナヲカタリ ショヒンカクカクスヽメ
ナラサレテカタル タビヽトコエヲオドロク子

巴江學字流 山木杜鵑愁
ハコウマナンデジヲナガル サンボクトケンウレフ
ショクヘユキナラフ ホトヽギス山ニナク

詩 同七字對句

詩礎

花外子規燕 山岫連
クハグハイシレキヨウシノツキ サンヂクヨツラレ
月ノヨニヒヽキスヲヒキク ヤマノクキニ

水邊精衛漸 杜鵑啼
スイヘンノセイエイセフコウヲヨミホ トケンナク
ウミベノウレホト氏ニ ナクホトヽギス

望鄉臺下秦人去 顧雲霄
ボウムケイタイカシンヒトサル カヘリミウンシヤウヲ
タコクヘイタ人大ヘリ アヲムイテ

学射山中杜魄哀 子規啼
ミナブシヤヲサンチウトハクカナシ シキナク
ユミ イコヲヲヒ氏ニス ホトヽギスノコエ

詩 子規啼 韋應物

高林滴露夏夜清 南山子規
カウリンテキロナツヨレサヤカナリ ナンザンノシキ

啼一聲 夏茂ミ露ヒヤヽカナル晴
ナク セイ 月ノユフベ子規ノ一コエ

オトヅルリンカノ家 孀婦抱子泣我獨
オトヅレ隣家ノ孀婦抱子泣我獨

展轉何為情 時ニ感ジ物ニ應ジ
テンテンカイヲ 時ニ展轉ノ愁ヲ催

シ霜ノ小兒ヲ抱キナガラ泣
シモ婦ノ小兒ヲ抱キナガラ泣

クガモノカナシク自身ニイフカルモ
ヒトリアハレ

ニタアハレ
リトナリ

郭公 蜀ノ望帝其臣下
整軍 不如歸

ヲ讓リ亡ヒ去ル時ニ此トリ
ノ妻ニ滛シテ位

啼故ニ蜀人ホトヽギスノ啼
ヲ聞テ望帝ヲ悲ム其鳴

ヲ聞テ望帝ヲ悲ム其鳴
ヲ不如歸ト云ガゴトシ

諫鼓鳥 布穀 郭公の雌
クヮンコトウ 鳩鴉 ヲクヮンコウノメス

鳩 うつこる板屋の背戸の里塚越
ハト ハヤヒヤヒヤ背戸を出て其日ホヒヤヒヤ多半秋

葭原雀 部葦 蘆又ハ葭原
ヨシハラスヾメ ブヒ アシ ヨシ

の中にてくーまくー
ヨシノナカニテクーマクー

おくく吉原
雀もいつ

老鶯 △乱鶯。四月又ハ
ロウヲウ

〳〵して其声やれこゝろ〳〵
故ヨ老の名あり△乱鶯モ同ー

鶯附子　よく孔引音の鶯小子餅の鶯と附て意と習ふ

鷹塒入　三才圖會曰鷹四月羽毛と易んとする時章緡ととゝ鳥屋の内に放ち新毛生ずと七月中旬鷹のごゝ

(秀)鷹三百首　あしたや鷹ふ初去行業例ふん　定家

○鷹三百首抄ふ卯月八日小塒ふ入七月十四日ふ出をといふ　定家の説

蜚蠊　蟄虫　飛蟻　白蟻　俗小ようて蟻の羽を生して枯れる

桂ゝり出るゝ

蝙蝠　伏翼。天鼠。仙鼠。飛鼠。夜燕。蚊食鳥ゝも云○俳ふ鳥ゝも兎ふも二句去ゝ鳥虫の間まうりかゝて身形色声牙爪まで鼠ゝ似て肉の翅ゝ大きい老鼠の化成ゝるゝ古き寺院又い橋の下ゝどふ有性椒を好む故ふ山椒を紙ふ包ゝて抛ゝ其ゝ地ふ落る其所を捕ゝるゝ　あやまりて手の指ふ噛つけバ其ゝ所ゝ腫ゝ急ふ山椒をあゝふ付ゝバ脱ゝ

(秀)新撰六帖　内大臣

日暮れい彩小あゝ　あゝさの風も涼ゝ

和泉式部

夫木

人もなく名をとるゝん浦ふて　ひゝいゝ有ゝも君を恋ゝん

(能)海蝦　字治の　蚯蚓出　此ゝろ土中ふ

さゝしや一寸其角

ゝ出ゝ　○鷹条骨ゝ

(能)又ゝも脆ゝ　ゝ信更

蜘蛛　異名　龍蟲　蠶蟲　蠾蝓　蜘蛛　蟹子

(秀)夫木

さゝかゝの糸ふ流ゝる白雲は　能因

あしくうこゝひ 五七こ

(詞)さかよ。蜘の井ゐた。蜘のゐるもひさかゐ。蜘のわゝぐさ。もゝぐさ。さゝがふ。繭。衣ひく弧。蜘女。糸さぐ。さぐたのいと。さうる糸。てを取もゆ〜ふひくいと。あさひ糸。ひろてふいそぐ。蜘の糸

前彩彩をひく糸。ま茅蒸ひく引

(俳)蜘のてふ 風を思ふ くぐろく

蛛の巣は暑きを知らず 袋水を思貫

(狂)風はよく吹くしとても蜘の網 ひくる世界は沙羅の大数常楽菴

(詩)蜘蛛之詞 唐 元稹

蜘蛛天下足 巴蜀就中多 世間多キヲ中ニモ蜘蛛ノ中ニモ多キハシヨクノクニナリ 縦隙容長蹄虚空織横羅 スコシノスキアイカニラコクウニテスヲカケル

縈纏傷竹栢 噍噬及喪蛾 木タケヲメクリ ムシヲノミトヒテトルソ 為送佳人嘉

珠櫛無奈何 スルヿトコロテモ巣ヲカケルヿニコヽリイルヿナリトヅ

蚕眉。蚕蘭 蚕蛾。眉ゆうのまゆ

○眉と作る時といでと云その後蛾と卵と産是と翌年の種子

(俳)源氏見さもいやら眉を入 柳雪

枝蛙 木の枝の居て鳴く故名づく。雨蛙ともいふ

(俳)蛙かる春のよひ あゝ花の飛良

鹿茸 鹿袋角

○鹿茸。春落て四月ふ生ず角袋のまゝ袋角と斗も季を持ず

蟋子 (異名)轆轤。虎蟋。蟋蟀 ○挑掉子。蟹の属

初鰹 ○鰹一名○松魚。肥満魚。堅魚。至て早き春よりいづく東都さては甚賞玩と価尤貴

(俳)ぞめかう一月ふ仕たる初松魚 風光

鰹釣 餌を用ひずして牛の角或は鯨牙にて釣

生節

鰹魚を四つに割りよく蒸し燻乾して脯となすなり

其いまゝ堅硬なるものを世俗よんでなまぶしといふ

必用

此部は四月要用の事又は天氣養生の法等を記す

日刻

己の日己の刻事をなすに日時の十干に用ゆべし月建に

出行作事

西の方に向ひては今月天道西に行故

破軍			
夜九ツ 未の方	夜八ツ 申の方	夜七ツ 酉の方	
朝六ツ 戌の方	朝五ツ 亥の方	昼四ツ 子の方	
昼九ツ 丑の方	昼八ツ 寅の方	昼七ツ 卯の方	
暮六ツ 辰の方	夜五ツ 巳の方	夜四ツ 午の方	

向方

樂事

清和の天と云霞も霧もなくして空の氣色翠なるに○更衣かゝる所にて衣服よゝ○木々の葉若やかなるの義

山吹も咲のこゝろ○牡丹芍薬盛り富貴人○郭公の初声○葵祭

天氣

曇りても北風強く晴る西南の風は雨ふる梅雨の前西風続吹と云々云昼夜之此風なて北国廻船来る○今月勞有米麦多○庚辰辛巳に雨降は米價貴し○丙寅丁卯に雨降は蝗○甲子庚申の日雷なれは禾に虫つく○今月雨多くなれは麦よわし夜雨多くなれは殊に麦を損す

養生

立夏の後四十五日北斗辰巳に建る此日乾こゝろ来る疾風暴雨なる当日是に人を傷ること急なり虛邪賊風とゝろ聖人これを矢石の如く避くゝろ〻〻委しくは内経を見よ

四月用意之品

海蘿子干

今月を〻〻よろしく

七月七日まで干次とりつくり
季ハ夏とをるなり

黴不出法

天氣よろしき時日よさしてそうれさるべく箱よりまた紙又てをそえまた張りおきて梅雨のちこれをひらけいかびいづる事なし妙なり

衣服をもかくれおくれをれがかびを生ずること

草木を伐法

この月諸木をきるべ蛭をむしるの葉あるいきをい撰ふてよのころろきうさるなり

○菖蒲五月五日いとりて能葉いろるなり

糊ふ虫はぐる法

樟の葉をおろひめをして物ひ日数と経ても虫少しも生ずる

四月飲食并料理献立

料理

汁

すき　塩鳥　すまし　清

たい子　鱠　あぢ　あぶらのこ　あぶらのこ　あぶらのこ　しそ

たいの子　しそ

たい　見玉よ　しそ　もろこが大こん

味

こい　煮物

焼あゆ　竹のこ　竹のこ　竹のこ　竹の子　竹の子

さぎ　塩鳥　絲いも　かも瓜　竹の子

竹の子　切ち豆　吸物

差

すぐきをあぶり　しそ　もろこが　しそ　きうり　ゆ　ゆ　あゆ　しそ

物

いり　青あへ　なべ　ろくめ　ごまそ　うどと貝　まて　ぶり　おくき　きめ

和會

すくてん　ケーキ　いろ　青とうがし　しそ　かいろう　こいしぐれ　いろ　しそ

精進

汁

丸ひらん 大すん

しそのくき

なすび 白いけ 竹のこ 乗つき うつぶ

ぜんまい 茶茸 ゆを

清汁

紅いも 油あげ あさ豆

膾

たつが大根 きくらげ あずふ

あさうり 茎せうが くりとで

赤そ くりくらげ

さいとうふ せん

まるぎ くらげ

差味

焼茄子 引ささき くらげ

もずく せんぎ くらげ

竹のこ 紅いも

ふきのとう ちくわぶ

なすび やうが

竹のこ ちくわぶ

煮物

青豆 いいけ

和會物

さや豆 ちろぎ

ちろぎ あへ

豆ごま あへ

時物

魚

鯉。生節。あら。あま。

鰆。鱧。干たも。千鰊。

鳥

塩鳥賊 さすど

鷺。青さぎ。五位。

鵜。塩鳥ゐい

青物

苣の薹。青さんしう。

かりぎ。ちぐりひ

たくきぐ。蕗。くぐ。蓴。

根いも。あらぎ。うりこ。

海松。もづく。ちいき。なまい。

ちりきんそ。ゐの井房。山うど。

うどうがめこ。ちそ。栄しうが。

白うり。きうり。かも成。青也。

あつぜのそう。竹のこ。そく豆。

さや豆。かいうり。ふうぶ。

きそうがし

ちくしくげ

酒味醫ざる法

夏い酒の味 酸くうり

安し酒壹升の中へ樫の葉

、五枚ゞ入まば味ひ少しを

かくらび

貯竹筍法

盛り過ぎ 終る時分

しゝ三十日過るまでも生なて

貯んと思ば四分よりに大筍を

ところさめよ井の中へはりさげ水際を放し度目よりも水氣の入らぬやうにして置べし五月上旬比筍の終り成を六月はくるゝ少し損ぜず

同法　皮を去り古きを処を切捨二つに割て鰤の間に塩を一ぱい入れ桶に多くべ上に重もかさね蓋をしてあり〳〵とかをくべし

又法　皮を去り熱湯にそゆびきをして紙にくべしゝそ用る時白水にあらうて用色白くしてよし

茄久しく貯法　孝びを桶に入蓋して河の瀬早き処に埋め石をおもしをしてみをく極しつるまで也生ずそよく持つ